

『紅樓夢』「風月宝鑑」考

— 明清小説・戯曲に描かれた鏡中世界との比較から —

森中美樹

はじめに

清の乾隆年間に書かれた『紅樓夢』（原名『石頭記』）第十二回に、人妻王熙鳳への恋患いに苦しむ賈瑞が、宝鏡「風月宝鑑」に入り込み、鏡中の王熙鳳と情交を重ねて落命する一段がある。「風月宝鑑」の名は、原作者曹雪芹の近親者である脂硯齋の批に、「雪芹旧有風月宝鑑之書」（雪芹に旧^{もと}「風月宝鑑」の書有り）とある通り、『紅樓夢』の成書過程上に出現する書名の一つでもあった。⁽¹⁾このため、従来の「風月宝鑑」に対する研究は、鏡としての「風月宝鑑」よりも、書名としての「風月宝鑑」に関心が集まり、『紅樓夢』の成書問題との関係から論じられることが多かった。だが、小論で考えたいのは、成書問題ではなく、鏡の中に入るといふスタイルの特異性である。

これまでの研究で、「風月宝鑑」との関連が指摘された作品には、古くは『西京雜記』や唐・王度『古鏡記』などがあるが、このうち、鏡の中に入るスタイルを持つ

は、明末の董說『西遊補』（孫悟空が自身の情に惑わされて鏡中に入る）や、清初の吳偉業『秣陵春』伝奇（宝鏡「宜官宝鏡」の中を舞台に、才子佳人の情縁を描く）、蒲松齡『聊齋志異』など、『紅樓夢』に近い時代に生まれた一部の作品に止まっている。⁽²⁾

管見によれば、鏡の中に入り込むという発想は、六朝志怪や唐代小説には見られず、元代に入ってその萌芽が生まれ、明清へとつながったようである。後述するように、明清時代には鏡中世界が男女の情、とりわけ婚姻と密接に結びつく形の作品が散見される。であるならば、『紅樓夢』が描かれた清代中期には、男女の情を描く場として、鏡中が一つの物語空間を形成していたのではないかと、という推測も成り立つだろう。もし、男女の情を描く場としての鏡中世界というものがあつたとしたならば、それはどのような意識のもとで描かれた世界であつたのか、また、「風月宝鑑」との関係はどのようなものであつたのか、筆者の疑問は尽きない。

そこで小論では、従来の研究では取り上げられなかった「鏡中世界への出入」という視点から、明清時代の小説・戯曲に描かれた鏡中世界を分析し、それら諸作品との比較から、『紅樓夢』『風月宝鑑』の特質を明らかにしたい。

一 「風月宝鑑」の原型

『紅樓夢』第十二回、王熙鳳（鳳姐）に横恋慕した賈瑞は、恋患いが昂じて死の床に臥す。そこへ突然道士が現れ、「風月宝鑑」を手渡す（傍線、引用者。以下同様）。

（道士）從褡褢取出一面鏡子來、……賈瑞收了鏡子、……只見鳳姐站在里面招手叫他。賈瑞心中一喜、蕩悠悠的覺得進了鏡子、与鳳姐雲雨一番、鳳姐仍送他出來。……（賈瑞）心中到底不足、又翻過正面來、只見鳳姐還招手叫他、他又進去。

（道士は）ずだ袋から一枚の鏡を取り出し、……賈瑞が鏡を受け取ると、……見れば鳳姐が中で立って彼を手招きしています。賈瑞は喜んで、ふらふらと鏡の中に入ったように感じると、鳳姐と一儀に及び、鳳姐が彼を送り出します。……（賈瑞は）到底もの足りず、また正面にひっくり返すと、鳳姐がやはり手招きして彼を呼ぶので、またもや入ってゆきます。

このように賈瑞は鏡の中を出たり入ったりしている。

筆者は先にこの出入を「鏡の中に入るといふスタイルの特異性」と述べたのだが、実際のところはどうか。『古今圖書集成』などの類書を中心に、『紅樓夢』以前の鏡の描かれ方を調べてみると、宋代までの鏡故事の傾向は、およそ次のようになる。⁽⁴⁾

○宋代までの鏡故事の傾向

- ① 鏡が実像・実体を暴く話（辟邪・照妖としての鏡）
- ② 鏡の怪異（致富譚・予言など）
- ③ 破鏡重円故事（離別した夫婦が形見の破鏡を契機に再縁する話）
- ④ 鏡中に何者かの存在を認める話（多くは鏡神・鏡精）

①は照妖鏡あるいは照魔鏡とよばれる鏡、②と③は靈鏡としての鏡であり、古くから鏡に付与された呪術性・聖性に基づく話が中心である。また、④に関しては死者も含まれ、鏡中の幽鬼が現実世界に出て来る話もある。⁽⁵⁾だが、現実世界の人間が鏡の中へ入る話は、管見の範囲内では見いだせなかった。

ところが、元になると、伊世珍の『嬋媛記』卷下引『採蘭雜志』に、恋患いで病床に臥す男のもとに道士が鏡を持ってくるという、「風月宝鑑」によく似た話が出現する。⁽⁶⁾

方喬既与紫竹遇、……昼夜思之面貌。……終日悲嘆、幾成痼疾。……一日遇一道士。出一錦囊、内有古鏡。

謂喬曰、……吾有此純陽古鏡、……此鏡一触陰之氣、留影不散。……鏡背有篆書云、火府百煉純陽寶鏡。方喬既に紫竹と遇ひ、……昼夜之の面貌を思ふ。……終日悲嘆し、幾ばくして痼疾を成す。……一日一道士の、一錦囊を出すに遇ふ。内に古鏡有り。喬に謂ひて曰く、「……吾に此の純陽古鏡有り、……此の鏡一たび陰の氣に触れなば、影を留めて散ぜず」と。……鏡背に篆書有りて云ふ、「火府百煉純陽寶鏡」と。

道士が方喬に渡した「純陽古鏡」は、あたかもカメラのように紫竹の姿を鏡中に留める。この部分には、鏡の中に入るといふ発想の萌芽が見られる。この話は、明・王世貞『艷異編』や馮夢龍『情史』にも採録された。『情史』では、「紫竹顧鏡、影遂留焉」（紫竹鏡を顧れば、影遂に留まる）の八字が加えられており、紫竹の影が鏡の中に入ったことが強調されている。紫竹と方喬は、これが縁となつて結婚する。

「純陽古鏡」と「風月宝鑑」を比較すると、結末は違ふが、途中までは非常によく似ていることがわかる。

○「風月宝鑑」との比較

男の恋患い→道士の登場→鏡を得る
→鏡中に思う相手の姿がある

《

》

婚姻成就「純陽古鏡」

落命「風月宝鑑」

また、清・蒲松齡『聊齋志異』巻六「八大王」にも、「純陽古鏡」に影響を受けたと思われる鏡が登場する。

（馮生）得一鏡。……佳人一照、則影留其中、磨之不能滅也。……時肅府第三公主絶美、……（馮生）照之而帰、……審視之、見美人在中。
（馮生）一鏡を得。……佳人一たび照らせば、則ち影其の中に留まり、之を磨けど滅すること能はざるなり。……時に肅府の第三公主絶だ美なり、……（馮生）之を照らして帰る、……審らかに之を視れば、美人の中に在るを見る。

このような類話を生み出した点から見ても、「純陽古鏡」が後世に与えた影響の大きさが窺える。「純陽古鏡」の来歴は不明であるが、この鏡の持つ「男女を取り持つ」という性格は、「八大王」の鏡や「風月宝鑑」に受け継がれている。そもそも「風月宝鑑」の「風月」とは、男女間の色恋を指す言葉である。以上の点から、「風月宝鑑」の原型は、「紫竹小伝」の「純陽古鏡」に求められると考えられるのである。

二 「現実世界→鏡中世界」を持つ作品とその特徴
明末清初になると、数は多くはないが、現実世界の人間が鏡の中に入る話がいくつか見られる。以下に、それらを列記する。

【小説】

○明・董說『西遊補』／孫悟空が自身の情に惑わされて鏡中に入る。情を悟って脱出。

○清・李漁『十二樓』『合影樓』／水鏡に映る影を慕い合って結婚した才子佳人物語。

○清・蒲松齡『聊齋志異』卷六「八大王」／男が鏡で女が姿を取り込み、結婚。

○清・蒲松齡『聊齋志異』卷九「鳳仙」／夫の奮起を促すため別居し、鏡中から支える妻。夫の合格後、鏡中から飛び出す。

【戯曲】

○明・許自昌『靈犀佩』／かつて鏡中に見た未来の夫と現実世界で出会い、結婚。

○清・吳偉業『秣陵春』（別名『双影記』）／有縁の男女を鏡が結びつける。鏡中に女の魂が入り、仙界で男と結婚。その後、現実世界での婚姻を目指す。

○清・朱佐朝『石麟鏡』／塵界の姻縁を映す鏡を得た女が、夫となる男の姿を見る。鏡は近い将来その男の身に起こる不幸を映し出す。鏡中で男の姿が消えると、女は精神錯乱を起こす。後に団円。

○清・無名氏『宝曇月』／女のもとに僧が現れ、塵界の姻縁を映し出す鏡「宝曇月鏡」を見せる。女が見ると、夫になる男の姿と自分の将来が映し出される。後に女は菩薩に済度される。⁽⁹⁾

一見して気がつくのは、男女の情、それも婚姻と関わる話が多いことである。この点について、清・朱佐朝『石麟鏡』伝奇には、鏡は人界の姻縁を照らすものだとする。（第一齣「末」無味真人）。

「末」我偶得瑞靈根一棵、和入蓮沙煉成宝鏡一面。上有「蕭郎鏡」三字、欲照人間一段姻縁。已註定楚中蕭謙娶秦玉娥為妻。

「無味真人」某たまたま靈芝の根一本を得たるにより、蓮沙を合わせ入れて宝鏡一面を煉成いたした。⁽¹⁰⁾上に「蕭郎鏡」の三字あるは、塵界の姻縁を照らし出そうというもの。楚中蕭謙が秦玉娥を妻とするは既に定められたり。

姻縁である以上、同じ鏡を見ても、姻縁を持たない秦玉娥の妹には何も見えない（第三齣「占」秦素娥、「旦」秦玉娥）。

「占」姐姐、什麼鏡中人？

「旦」妹子、你看。（指鏡介）呀。為何不見了？

「秦素娥」お姉様、鏡中の人って何ですの？

「秦玉娥」ねえ、見てごらん。（鏡を指すしぐさ）あら。どうして消えたのかしら？

鏡の内と外にある者が異性同士になっていることも、

鏡が姻縁の場であることを示しているように見える。

また、『聊齋志異』「鳳仙」の場合は既に夫婦であり、夫劉赤水の奮起を願う妻鳳仙が、別居して鏡中から夫の受験勉強を支える。

（鳳仙）遂出一鏡付之曰、「欲見妾、当於書卷中覓之。」

……因念所囑、謝客下帷。一日、鏡中人忽現正面、盈盈欲笑。……月余、銳志漸衰、游恒忘返。帰見鏡影、慘然若涕。……每有事荒廢、則其容戚。数日攻苦、則其容笑。……如此二年、一挙而捷、……（劉）攬鏡視之、……忽鏡中人笑曰、……（劉）驚喜四顧、則鳳仙已在座後。

（鳳仙）遂に一鏡を出し之に付して曰く、「妾を見んと欲すれば、当に書卷の中に之を覓むべし」と。……（劉）因りて囑する所を念じ、客を謝して帷を下せば、……鏡中の人忽ち正面を現し、盈盈として笑はんと欲す。……月余、銳志漸く衰へ、遊びて恒に返るを忘る。帰りて鏡影を見れば、慘然として涕くが若し。……事有りて荒廢する毎に、則ち其の容戚たり。数日攻苦すれば、則ち其の容笑ふ。……此くの如くして二年、一挙して捷つ、……（劉）鏡を攬りて之を視る、……忽ち鏡中の人笑ひて曰く、……（劉）驚喜して四顧すれば、則ち鳳仙已に座後に在り。

「鳳仙」の場合、単に鏡と現実世界との間を往来しているだけではなく、鏡の中の鳳仙が現実世界の夫の態度に応じて変化することで、夫の奮起を促し、現実を変えていく様子が如実に示されている。ここに見られる鏡中世界は、現実世界に従属した模倣の空間から脱却し、現実世界を変える力を持った別世界へと変化している。

こうした変化は、たとえば清・呉偉業『秣陵春』伝奇にも見られる。

この作品では、徐適（次楽）「生」と黄展娘「旦」の仲を「宜官宝鏡」という鏡が取り持ち、二人を婚姻に導く。その際、鏡神「末」および鏡神を掌る仙女耿先生「老旦」が登場し、二人の婚姻を成就させる。

ある日、展娘が杯を見ると、杯が水鏡になって、徐適を映し出す。対する徐適も、「宜官宝鏡」の中に展娘の姿を認める。展娘は鏡の中に入り込み、徐適と結婚する。

〔旦〕呀。杯裏却有個影兒。……呀。竟像個男子。

（第九齣「杯影」）

〔生〕（驚介）呀。鏡裏絶好一個女子、難道我眼花不成？

（第十四齣「鏡影」）

〔旦〕阿呀。我虛飄飄一個身子、不知怎麼、正像在鏡子裏一般。

〔末〕俺是鏡神、奉耿先生律令、撮黄展娘魂兒与徐次楽成親。

（以上第十五齣「思鏡」）

〔老旦〕我的鏡子、就是你的媒人。

（第十九齣「遇獵」）

「展娘」あつ。杯の中に影が。……まあ。男の人みたい。

「徐適」（驚くしぐさ）あつ。鏡の中に絶世の美人とは、まさか目がかすんだんじやあるまい？

「展娘」あれ。私ふわふわして、何だか知らないけど、鏡の中にいるようだよ。

「鏡神」某は鏡神にて、耿先生の命を奉じ、黄展娘の魂を撮して徐次樂と婚姻を成さんとするなり。

「耿先生」私の鏡は、そなたらの仲人。

展娘の婚姻は、まず鏡中で成就する。ついで現実世界での婚姻成就へと展開する。このように、鏡中での行為や出来事は、現実世界へと波及するのである。

この点がより鮮明にわかるのが、先に見た『石麟鏡』伝奇である。第六齣、獄卒が鎖に繋がれた蕭謙に刀を振り下ろすと、鏡中から蕭謙の姿が消える。これを見た秦玉娥は気絶し、精神錯乱を起こす（「旦」秦玉娥、「丑」侍女）。

「旦急起扯丑打介」你怎麼殺我？

「旦看鏡介」阿呀、好吓。這、唄「風流一時、夫妻凋房」。

「旦奔介」……我要到鏡中去。

「秦玉娥、急ぎ立ち上がり、侍女を引っ張って打つ

しぐさ」お前、なぜ私を殺したの？

「秦玉娥、鏡を見るしぐさ」ああ、たまらない。これぞ、唄「お楽しみは一時、夫婦の別れ」。

「秦玉娥、駆け出すしぐさ」……鏡の中に入らねば。

鏡は秦玉娥の錯乱を引き起こすことで、深窓の令嬢である彼女を外に連れ出し、現実世界の蕭郎と出会うための装置として働いている。こうした描写からも、鏡中世界が現実世界に変化を与え、婚姻の実現を促していることがわかる。

以上の考察から、鏡を挟んで出会った男女は、婚姻が運命づけられていること、そして、予定された婚姻を実現するため、鏡中世界が現実世界を突き動かす空間となっていることがわかった。

それにしても、なぜ鏡中世界を描く作品の内容は婚姻譚に偏るのであるのか。

三 主情主義の時代と鏡中の情

推測に過ぎないが、それは明末清初の文芸思潮が、明・湯顯祖『還魂記』に代表される主情主義に傾いていたことと無関係ではなからう。これは、刹那の快楽を求める色情とは対極に位置する、婚姻に重きを置いた情である。馮夢龍は『情史』の序で次のようにいう。

六経皆以情教也。『易』尊夫婦、『詩』有関雎、……

豈非以情始于男女。

六経は皆な情を以て教ふるなり。『易』は夫婦を尊び、『詩』に関雎有り、……豈に以て情は男女に始まるにあらずや。

『情史』が別名「情天寶鑑」を持つことも、情と鏡の結びつきを窺わせるものであるが、ともあれ、こうした主張の影響下で生み出された物語は、婚姻を人倫の最重要事と位置づけるものだった。たとえば、明末清初刊本の無名氏『山水情』第一回の冒頭には、

話說人生夫婦一倫、乃是五倫中第一件。

夫婦は人倫の一つと言いますが、五倫の中でも第一番なのです。

とあり、清初・松竹草廬愛月主人編次『戲中戲』（一名『比目魚』）第一回の冒頭にも、

人生在世、最大者莫過于人倫。最重者莫過于夫婦。男婚女配是人間一件大事。

人がこの世にあつて、最も大事なのは人倫であります。その中で最も大事なのは夫婦です。婚姻は人生の一大事なのです。

とある。明末清初の動乱期を実際に生きた人々が、個々

の人生において、果たして婚姻を五倫の第一番目と考えたかどうかはともかく、文芸思潮においては、人生とは即ち良き伴侶を得ることであった。この時代、才子佳人の団円を描いた小説や戯曲が数多く出現したのも、こうした時代思潮の後押しを受けてのことである。決して鏡中世界だけが婚姻譚に傾いたのではない。湯頭祖『還魂記』は、夢中での婚姻を描き、情を称揚した。婚姻譚を描くことは時代の趨勢だったのである。

その一方で、鏡中の婚姻は不完全なものとして意識されていた。『秣陵春』伝奇第二十六齣に、次のようにいう（「小生」仙童）。

「小生」……我想玉杯鏡子、畢竟水月空花。……只是功名事大、前程路遠、不能久留。

「仙童」……思うに、玉杯・鏡などは、結局水中の月・あだ花というもの。……功名こそ大事、先は長いし、長逗留はさせられぬ。

鏡中の婚姻は結局「水月空花」、つまり幻なのである。周知のように、中国の通俗文学は福・禄・寿の十全を理想とする。鏡中世界でなされた婚姻が、現実世界での実現へと向かうのは、当然といえば当然の流れである。だが、その流れから外れるのが、『紅樓夢』「風月宝鑑」なのである。

四 『紅樓夢』『風月宝鑑』の特異性

以上、縷々述べてきたことをまとめると、次のようになる。

『紅樓夢』『風月宝鑑』の原型を探ると、紫竹小伝の「純陽古鏡」にたどり着く。「純陽古鏡」の持つ、「男女を取り持つ」という性格は、明末清初に現れた、他の鏡中に

入る話にも引き継がれる。鏡の内と外にある者は、有縁の男女であり、鏡中世界は男女の姻縁を語る場であった。鏡中の婚姻は、最終的には現実世界での婚姻成就を目指すのである。

では、こうした特徴を持つ明清の小説・戯曲と、『紅樓夢』『風月宝鑑』はどのような相違点があるのだろうか。

○明清諸作品と「風月宝鑑」の比較

作品名	鏡に映った相手	結末	姻縁の有無	救済の有無
風月宝鑑	思慕の対象	死	無	無
(紫竹小伝)	(思慕の対象)	(結婚)	(有)	(有)
『西遊補』	自身のあやかし	悟る	無	有
『合影楼』	未婚の男女	結婚	有	有
『鳳仙』	妻	再会	有	有
『八大王』	思慕の対象	結婚	有	有
『秣陵春』	運命の相手	結婚	有	有
『石麟鏡』	運命の相手	結婚	有	有
『靈犀佩』	運命の相手	結婚	有	有
『宝曇月』	運命の相手	済度	有	有

この表は、今回取り上げた作品と、『風月宝鑑』を比較したものである（「紫竹小伝」の成立は元代とされるので（一）に入れた）。

まず、『風月宝鑑』以外の明清諸作品の傾向を確認する

と、鏡の中にいるのは有縁の相手である（『西遊補』が例外なのは、孫悟空自身の情が作り出した世界を舞台とする自己完結型の作品で、他者を置いていないからである）。だから、その結末は当然結婚になる。一番左の『宝曇月』

が「済度」となっているが、これも結婚した後に済度されている。

これに対し、一番右の「風月宝鑑」を見ると、鏡に映ったのは、思慕の対象である王熙鳳であるものの、その結末は死であった。

他又進去。……到了這次、剛要出鏡子來、只見兩個人走來、拿鉄鎖把他套住、拉了就走。……（賈瑞）
末後鏡子掉下來便不動了。衆人上來看看、已沒氣了……。（第十二回）

彼はまた入って行きます。……今回は、鏡から出ようとした途端、二人の人が来て、鉄の鎖で彼を縛り上げるや、引つ立てて行こうとします。……（賈瑞は）それきり鏡を落として動かなくなってしまうしました。みなが駆け寄ると、もう息は無く、……

そもそも「風月宝鑑」の場合、王熙鳳との間には姻縁が設定されていない。それどころか、現実世界の王熙鳳は賈瑞を激しく憎悪している。

這畜生合該作死、看他來了怎麼樣！（第十一回）
この畜生かしちやおかかない、見てなさい来たらどんな目に遭うか！

この点は、ほかの明清諸作品が姻縁を持ち、結婚を目

指して展開したのとは大きく異なっている。

しかも、「風月宝鑑」にはいささかの救済措置も施されていない。結婚を目指さなくても、たとえば『西遊補』の場合、最後に道士が現れ、孫悟空を無明の闇から救い出した。結婚を目指した他の作品の場合はなおさらで、仙人や道士・菩薩の加護を受け、婚姻の成就が図られる。だが、「風月宝鑑」では、道士は賈瑞の救済に失敗してしまう。

「風月宝鑑」は次のような鏡であった。

〔両面〕皆可照人、……專治邪思妄動之症、有濟世保生功。……（賈瑞）拿起風月鑑來、向〔反面〕一照、只見一個〔髑髏〕立在里面、……便將〔正面〕一照、只見鳳姐站在里面招手叫他。（第十二回）

〔両面〕が照らせる鏡で、……邪念無分別の病を専門に治し、世人を救済し保生の功德があります。……（賈瑞）が「風月宝鑑」を手に取り、〔裏〕を照らすと、〔髑髏〕が中に立っています、……〔表〕を照らすと、〔鳳姐〕が中に立って彼を手招きして呼びます。

道士の持ってきた「風月宝鑑」は、裏も表も照らすことのできる両面鏡で、裏側には髑髏、つまり死があり、表側には王熙鳳、これもまた破滅への道が照らし出されていた。このことは、現実世界にいれば死、鏡中世界に入れば身の破滅、いずれにしても助かる道はないことを

示している。「風月宝鑑」に描かれた鏡中世界は、ほかの作品と異なり、物語が現実世界へと展開する要素を最初から欠いていたことがわかるのである。

以上、明清の諸作品に描かれた鏡中世界の描写と比較すると、『紅樓夢』『風月宝鑑』の特徴が見えてくる。「風月宝鑑」の鏡中世界は、明清の諸作品と同じく男女の情を扱っている。だが、その情は「風月」、つまり「色」であり、「邪思妄動之症」として扱われている。賈瑞の相手は結婚相手にはなり得ない人妻王熙鳳なのである。そのため、鏡中の情交を経ても、現実世界で賈瑞の邪恋が成就することはない。却って死を招くのである。これは、ほかの作品が婚姻成就を目指して、団円に終わるのとは大きな違いである。

また、「風月宝鑑」の場合、鏡自体が他と異なっている。この鏡は両面鏡であった。その中には、王熙鳳のほかに、髑髏が立っていた。そこには淫欲を戒める戒淫の主張が認められる。こうした主張は、他の作品には見られなかった。

鏡中の情を描く他の作品と比較すると、「風月宝鑑」の持つこのような異質さが浮き彫りになるのである。

おわりに

以上、小論では明清の小説・戯曲との比較を通じ、『紅樓夢』『風月宝鑑』の鏡中世界が持つ特異性を明らかにした。その結果、「風月宝鑑」に描かれた鏡中世界は、明ら

かに他と一線を画していることがわかった。最も大きな違いは、「風月宝鑑」の結末が団円ではない点である。

この違いは、「風月宝鑑」が独立した作品ではなく、『紅樓夢』という作品の中の一部分であることと無関係ではあるまい。なぜなら、周知の通り、『紅樓夢』もまた、悲劇的結末が予定されていた作品だからである。となれば、当然「風月宝鑑」と『紅樓夢』の関係について、部分と全体の関係から考える必要がある。特に、『紅樓夢』の主要舞台大観園が「天仙宝鏡」(第十七・十八回)の名を持つ鏡であり、主人公賈宝玉の情縁がこの鏡の中で描かれていることは、⁽¹⁾「風月宝鑑」との関係上、看過できない問題を孕んでいると思われるが、そうした考察は次稿の課題としたい。

注

(1) 『脂硯齋重評石頭記』甲戌本第一回眉批。なお、甲戌本第一回縁起によると、『紅樓夢』には、「情僧録」「石頭記」「金陵十二釵」「風月宝鑑」の書名があったことがわかる。

(2) 「風月宝鑑」に影響を与えた作品を指摘した論攷については、船越達志『「紅樓夢」成立問題研究史』(『中国学研究論集創刊号』、一九九八年。後に『紅樓夢成立の研究』汲古書院、二〇〇五年第一章第四節に所収)に詳しい。紙幅の制限もあり、小論の論旨の関係から、以下、書名のみ時代順に引用する。晋『西京雜記』卷一「鍊金為環」「身毒国王話」・卷三「咸陽宮異物」／唐『古鏡記』／唐『原化記』「漁人」／

唐『集異記』『陳仲躬』／唐『三水小牘』『却要』／清『秣陵春』／清『聊齋志異』『鳳仙』。

このほか、周策縱『紅樓夢』与『西遊補』（『首屆國際紅樓夢研討會論文集』、中文大學出版社、一九八三年。後に『周策縱論紅樓夢』文化藝術出版社、二〇〇五年所収）は明・董說『西遊補』との関係を指摘する。

(3) 『紅樓夢』の底本には、馮其庸主編『脂硯齋重評石頭記彙校』（北京文化藝術出版社、一九八七年）で内容に関わる異同の有無を確認した上で、古本小説集成所収『脂硯齋重評石頭記（庚辰本）』、上海古籍出版社、一九九一年を使用した。

(4) 小論執筆にあたっては、『古今圖書集成』を中心に、『太平広記』『太平御覧』『四部叢刊』『四庫全書』の全文検索および中央研究院など各種オンラインデータを検索した。また、戯曲に関しては、『元曲選』『元曲選外選』『六十種曲』のほか、中国都市芸能研究会 <http://wagang.econ.hc.keio.ac.jp/~chengyan/> のオンライン検索を利用した。この場を借りて謝意を示したい。

(5) 『太平広記』巻百三十「報応」二十九引『稽神録』『魯女思鄩』。

(6) 『採蘭雜誌』は書目に記載がなく、芸文志もこれを載せていない。『卿嬈記』は『卿嬈記』ともいい、元人伊世珍（伊士珍）の輯したものというが、『四庫全書總目提要』は、明人桑懌の偽託説を挙げ、該書に引用されている書物の多くが確認できない点を疑問視している。ただ、この話が『紅樓夢』に先行している点に間違いはないので、この問題にはこれ以

上立ち入らない。

(7) 『情史』巻三情私類「紫竹」。この話は、『艷異編』続集巻四に「紫竹小伝」と名付けられている。小論での呼び名はこれに従った。

(8) 鏡中への入り方には、「紫竹小伝」のように影が入る型と、「風月宝鑑」のように魂が入る型の二通りがある。そこで筆者は当初、両者を分けて考察したのだが、特段の差異を認めることができなかった。そのため、小論では両者を分けず、一括して扱っている。

(9) 『宝曇月』伝奇は未見。小論で記した内容概略は、清・黄文暘編纂『曲海総目提要』をまとめたものである。

(10) 「和入蓮沙」の四字はよくわからない。今、かりに読んでおく。博雅の御示教を賜れば幸いである。

(11) 程偉元らの補訂により完本化された現行の『紅樓夢』百二十回本第十八回では、「天仙宝鏡」につくるが、原作者曹雪芹の原稿に近い己卯本・庚辰本では「天仙宝鏡」につくる。「鏡」が曹雪芹の原意に近いと考えられる。

〔引用書目一覧〕（時代順）

○元・伊世珍『卿嬈記』 学津討原所収、台湾芸文印書館、一九六六年

○明・馮夢龍『情史』 魏同賢主編『馮夢龍全集』七所収、江苏古籍出版社、一九九二年

○明・董說『西遊補』 古本小説集成所収、上海古籍出版社、一九九二年

○明・許自昌撰『靈犀佩』伝奇 『古本戯曲叢刊』三集、上海商務印書館、一九五七年

○明末清初『山水情』 古本小説集成所収、上海古籍出版社、一九九二年

○清・吳偉業『秣陵春』伝奇 李学穎集評標校『吳梅村全集』所収、上海古籍出版社、一九九〇年

○清・李漁『十二楼』 中国話本大系所収『覺世名言十二楼』、江蘇古籍出版社、一九九一年

○清・無名氏『石麟鏡』伝奇 『古本戯曲叢刊』三集、上海商務印書館、一九五七年

○清・愛月主人編次『戯中戯』 古本小説集成所収、上海古籍出版社、一九九一年

○清・蒲松齡『聊齋志異』 張友鶴輯校『会校会評本聊齋誌異』、上海古籍出版社、一九八六年

(附記) 本稿は、中国中世文学会平成十八年度研究大会(平成十八年十月二十一日、於広島大学)における口頭発表をもとに手を加えたものである。司会をしていただいた福山平成大学の市瀬信子先生をはじめ、貴重なご教示・ご質問を賜りました諸先生に対し、深く感謝いたします。